

自由

懐深い海

自由という海

その海にも氷の群れが押し寄せるときが来るのだろうか

その恵み深い海の中で

蟻や蜜蜂よりも高度に分化した社会

都市という奇妙な社会の中で暮らす我々を待つ破局

押しのけられ、ぶつ切りにされる‘我’

騒音、密度、権利、自由、節度・・・

一見、相反するそれらの連立方程式を解く毎日

混雑を極めた世界を尻目に

孤独であることは不可能だ

そこには孤立と無視があるばかりだ

意識そのものが他者の顔をうかがい

自己を無視して右往左往する

我思う、しかれども、我は在らず

譲り渡すしかない・・・

この手に余る、密な不織布ふしよくふのような人間社会を

すべてまるく治める規則的な生活をおくるためには

物理的空間に次々と重ねられるレイヤー

そのそれぞれに住む我々の分身たち

進化は淘汰を伴うものであるはずなのに

譲り渡すことによるのみ

すべてが可能になる、と・・・

我々はそれを選びつつある

懐深い海

自由という海

その海にも氷の群れが押し寄せるときが来るのだろうか

(2004.2.1)